

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究（二十九）——

津 守 真

五歳児二学期

はいってくれない？——いれてあげることと

いれてもらうこと

九月十二日

二学期が始まって二日目である。

部屋の隅では男児数名がつみきと電車をしている。机の上では  
かいたり作ったりしている子どもたちがある。遊戯室との間を往

ったりきたりしている子どもたちなど、それぞれ何かしている。

私は製作をしている子どもたちのわきの椅子に座っていると、

後から急に男児Mが肩を叩き、「おじさん はいってくれない？」  
と言う。

Mが遊んでいる部屋の隅には、つみきが並べてあり、トンネル  
の部分や坂道などがあって、線路のように長く伸びている。男児  
M、T、Ms、Kらが画用紙で作った電車を動かしている。私はそ  
こに腰をおろす。つみきの上を、自分で作った画用紙の小さな電  
車を動かしたりとめたりするのは、そのことに向い合ってみると、

落着いた面白さであることがわかる。私はMに呼ばれて入ったのだが、だれもそれ以上私に期待しているのでもなさそうである。

しばらく私はその中に座って見ていたが、私も何か作ろうと思いい、画用紙を簡単に折って信号機を作り、そこに立てると、「あ、信号でしょ」と云って、忽ち子どもの所有になる。私も画用紙で赤い地下鉄を作ってつみきの線路の上におくと、「地下鉄はこちらです」と、トンネルの中の方にいれる。私は自分で動かせる自分局の電車を作りたいと思いい、もう一つ小さな電車を作ると、「あ、いい」と言って誰かが持っていてしまふ。

「はいってくれない？」と言われたとき、最初、私は何かをたのまれるのかと思った。かいてくれとか、押さえてくれとか。ところがじきにそうではないことがその場でわかった。そう言った子どもも、私に「はいってくれない？」と言ったことを忘れてしまったかのように、自分のことをして遊びつつ遊んでいた。「はいってくれない？」というのは、遊びにいられてあげるといふ子ども好意だったようである。注

くるくると遊んでいる子どもたちの中に腰をすえて座ってみると、全体を眺めて座っているのとは違ったものが見えてくる。自分で画用紙を切って箱のように作り、赤や青、黄色で好きな色にぬった小さな電車を、自分の手で動かして、トンネルの中をくぐらせ、車庫に並べたりするのは、そこで遊んでいる者にとつては、ひとつの小さな世界であり、その瞬間には、全世界でもある。その動きの中にある落着きと面白さは、こうして中にいれてもらわないと、伝わってこないだろう。こんな遊びがまだ面白くてたまらなかつた小さいころの感覚が心の中に甦えるのはこういう瞬間である。私はただ見ているだけではなくて、自分でも何か作ってみたくなり、画用紙を切り始める。信号機や電車を作ると、だれかが「あ、いい」と言って忽ち持っていてしまふ。次第に自分でも気に入った電車が作れるようになる。自分で赤い地下鉄など作って、手でもって動かすのは愉快なことである。

私はつみきと電車の遊びに入れてもらっていて、子どもたちがそれぞれ自分の遊びを落着いて遊んでいることに印象づけられた。私はそこで面白く見ているだけでもよかったが、自分の面白さを追求できたことは一層よかったと思う。こういうことからみ

ると、遊びにいられてもらうというのは、お父さんの役をとるとか、運転手になるといふような活動の機能の一端をになうことにとどまらない。めいめいが遊んでいる中で自分も自分の遊びを追求することが、遊びにいられてもらうことである。自分の追求するものがなくて、他人に対する指図や干渉が多くなると、次第に遊びにいられてもらえなくなる。こうして、子どももおとなも、それぞれが自分のことをしながら、その中で互いに相手のしていることを取りいられているのである。

私が子どもの遊びに参加する仕方について、このクラスの子どもたちとの三年間にわたるつきあいの経過を最初から考えてみると、いくつかの段階があったように思う。最初のころに、私が遊びにいられてもらえるかどうかをためられているような時期があった。(そのことについては、このシリーズの(5)に記した。)その後、何かをしてくれと頼まれて遊びに入ることがしばしばあった。(肩車してくれといわれる(6)、かけっこしようといわれる(7)、砂を掘るのを手伝えという、一緒に山にいらてくれという(8)、自動車をかいてくれという(9)、など)。きょう、この場面では、私は特別にその子たちのために何かをする必要はなく、一緒にいて自

分のために遊んでいればよかった。五歳の二学期になってそこまです成長したのだと云えよう。もちろん、これは明瞭に区切られた段階ではなく、どの時期にもいずれもが織りまざっているのである。

これから先、子どもの年齢が大きくなるほど、直接に子どものために何かをするよりも、おとなも自分のことを追求しながら共に生活することが多くなるであろう、更に、高校生、大学生になれば、一緒にいるおとな自身が真剣にとり組んでいるものを持って、人生を追求していることがもっと大きな意味をもつようになるであろう。これはおとなにとっては大変なことであるが、プラスの点でもマイナスの点でも、青年は人間や社会の基本的なことをおとなを通して学ぶのであると思う。

幼児期から児童期、青年期への移行は、具体的な生活面をみると、異質なものへの飛躍がある。しかし、その根底にある子どもとおとなとの関係については共通なものがある。遊びにいられてあげること、遊びにいられてもらうことは、子どもの側も、おとなの側も、それぞれが自分の遊びを追求することができるようになっていくことが前提になっている。幼児期には、おとなも幼児の世界に入って、その中でできることを見つのであるし、青年期には、共通の人生の地盤に立つことができる。そして子ども

が自分で遊びを追求するところまで育てることが保育であるというだけでもきょう。

「はいってくれない？」と言って私を遊びに連れてくれた子どもの世界には、自分でやっているから誰に入ってこられても大丈夫だという自信と、おとなでもいれてあげるといふ寛大さがある。いれてもらうのにふさわしい者となるのはどうあったらよいだろうか。それはおとなに課せられた課題である。

注 日本語で「入る」は、内に入るの意であって、内部空間が想定されている。印欧語系の言語でも、語源的には家に入ることがもとになつてゐる。(Buck: A dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages)

子どもから自発的に遊びに連れてくれるときには、単に活動に参加させてくれるというだけでなく、子どもの中、内面空間に入ることを許されたと言えるだろう。

ここでもう一つ注目したいことがある。それは、この日が二期が始まって二日目だということである。長い夏休みが終つて、

幼稚園や学校やつとめにゆかなければならないことは、多くの人にとって、緊張や不安を伴う。そういうときに、幼稚園にいつて、いつものように、自分自身のペースで遊びをつづけることができるということは何と有難いことであろうか。子どもは忽ち幼稚園の生活に新たな生きがいを見出すであろう。最初の日から始業式や新たな課題で不安と緊張が増大させられたら、幼い子どもにとって、どんなに負担になることかと思う。幼稚園の年齢組の年齢は、丁度、新学期の憂鬱を感じ始める時である。

次に掲げる新学期直前の家庭での子どもの記録はこのことを示すであろう。

### 新学期が始まる——未来への不安

八月三十一日

夕飯の祈りのとき、五歳のAは「あしたからおにちゃん学校が始まりますが、ちこくしないようにしてください」とお祈りした。母親が「よかったわね、Aちゃんにお祈りしてもらえ

て」と言うと、九歳の兄は「じゃあ、九時に出てもちこくしないの？」と言った。すると四歳の妹が、「ちがうわよ、そんなにおそく出ないように、神さまが守ってくださるのよ」と言う。

夕飯のときの子どもの家庭生活のひとつまである。小学校が明日から始まるという日、幼稚園の妹も気が落着かなくなる。幼稚園がはじまったら遅刻しないようにということを早くから心配していることがわかる。

#### 九月四日

Aは夏の終りごろから、私にべたべたとくっつくことが多い。ねころがって、「あちよこのなかに、ハクチヨクチエメント(白色セメント)はいってるの？」など、赤ちゃんことばで、私の腕にからみつく。同じことを何度でもうるさくきく。(夏休みに、白色セメントを使ってタイル貼りをして遊んだ。)

私が原稿を書いていると、「そこで何やってんの?」「原稿かくの?」「どうして原稿かくの?」「これもお手紙なの?」「なに?」「なに?」と何と答えてもたずねる。

A「おとうちやま、今晚からどこにいくの?」

私「宇都宮」

A「うつのみやってどこ?」

私「汽車に乗っていくの」

A「どこ?」

私「汽車に乗って行くの」

A「どこ?」「どこ?」

私「何度言っても、」「どこ?」「どこ?」「ときく。」

ねころがってべたべたくっついて、ことさらのように赤ちゃんことばを使ってまといつかれると、思わずふりはなしたくなる衝動を覚える。

しかし、これは考えてみると、子ども自身の心に何か屈託があるから、こうしているのである。こういうときは何かあると思っ  
て、おおらかに扱っていないといけない。後になって考えるとい  
ろいろのことが見えてくる。

ことさら赤ちゃんことばを使うというのは、赤ちゃんの状態に  
もどりたい時だろう。赤ちゃんならば家の中にいられるし幼稚園  
にいかななくてもよい。本当の赤ちゃんだったら、家の中にいて  
も、心は未来に向っている。しかし、そこを通り過ぎた子どもが  
赤ちゃんになりたいときには、その心は未来よりも過去に向って  
いるのだろう。未来を拒否しているかもしれない。過去と未来と  
が通い合っていない。

こういうときには現在に対しても不確かさがあるのだろう。  
「そこで何やってんの」「どうして」「なに」「なに」と質問し  
てまといつく。これも何か返事を期待しているのではない。揺れ  
動く自分の不確かな心を、もっと大きなものに寄り添わせたい気  
持であろう。くり返し同じ質問をしてまといついてゆく。

未来に対して不安があることは、次の質問にはっきり現われて  
いる。「こんばんからどこにいくの?」「宇都宮」と答えても、「ど  
こ?」「どこ?」「とたすね、何と答えても、「どこ?」「どこ?」  
と際限なくきく。父親がこれからどこにいくのかという未来に対

する関心である。宇都宮と答えても、子どもにとってはそれは何  
の意味もないことは明らかで、もっといいねいに学校との関連で  
説明すればよかったのではないかと思う。子どもにとっては、九  
月から始まる未来が見えていないのである。

人は自分の未来に不安があるときに、関係の深い人の未来にも  
関心をもつ。まして幼児の場合には、具体的生活空間は限られ、  
具体的な周囲の状況に依存する度合も強いので、直接に関連の深  
いおとなの動向には大きな関心がある。子どもにうるさくたずね  
られ、まといつかれるとき、それをふりはなすならば、子どもの  
不安は一層大きくなるだろう。子ども自身の心の整理がついてく  
れば、からむ手は自然にとけてくるだろう。

新学期に再び幼稚園にあって、そこで十分に遊ぶ生活が確立  
し、自分らしく生きることができるようになれば、過去と現在と  
未来は調和して一つにとけ合ってゆく。それだからそれぞれの子  
どもが自分らしく生きられるように毎日の生活をつくってゆくこ  
とが保育の絶えざる課題となるのである。新学期の第一日から、幼  
稚園で自分らしく遊べるということは、子どもにとって幸せなこ  
とである。

新学期の前は、子どもにも不安があるが、おとなもまた同様である。ある学校の先生は、新学期の前になると胃が痛くなり、御飯が食べられなくなるという。ある大学の教授は、新学期の最初の講義の前晩は眠れないという。その不安の強さは人によってまちまちであるけれども、だれにでも多少の緊張があることは共通である。また、その緊張や不安の度合は、受けいれ側の状況にも関連がある。前晩には心配があっても、行ってみたら自分のペースで動くことができたというようなときには、じきに新たな希望が生れてくる。新学期が進むにつれて、どの子どもも、それぞれに應じて、一段階上がったところで、新たな生活を作り上げてゆくであろう。そして間もなく、秋の爽やかな充実した日日を私共は予期している。

丁度そういう時期に、九月早々から、幼稚園や学校では運動会の練習がはじまる。そうすると子どもはそれぞれ自分のペースで遊び、生活することが困難になる。新たな不安と不満が生じる。秋にはその他にもいろいろの行事がある。落着いて幼稚園の中で十分に遊ぶことのできる日を確認することができるだろうか。

五歳児の二学期と三学期は、私のささやかな経験の中でも、子どもが最もよく遊ぶ時期である。幼児期の遊びが一つの最高潮に達

する時期である。このあと児童期になると、子どもはよく遊ぶけれどもその質が変化してゆく。いわば幼児期の遊びが花開くこの時期に、子どもが十分に遊ぶことのできる生活を作ることとは、幼稚園にとっても、家庭にとっても最もたいせつな課題である。

(つづく)

